

大坂新聞錦画 第七号

廣島縣山根友次と云ふ子入りしを  
 是より豊家の我慢強く文明の世を  
 羨みて學問の早賤の要務を悲ぞと  
 二子を我儘に養育すも隣家門上綱が  
 長男若次の九年三月月にて一校一學  
 子不忘明治八年の春學校より歸りし  
 彼の明友あり友次が二子に逢ひ父子の  
 書一紙行をとりたるを兄弟を人  
 ちやせりや馬鹿く尻を喰へと云事  
 ありれ果て親みかく告る何思ひん父友次  
 黙然として溜息つきて我今日迄誤りたりと  
 と涙を落し二子ゆい親の面目を神々と思ひ  
 明日より學校へ行くと出指致し〜れと云ふ見  
 父の言を汲分て日毎上校を情むかりぬ誠  
 時代の難有れ心ある草木まで雨露の恵を浴



養育の時をあるが人の報知六百七号に出

本居宣長